

古典教育と文語教育

三 浦 勝 也

(要旨)

現在の中等国語教育(中・高)においては古典教材に依つて文語文を教えているが、そこには言語教育の一環としての文語教育の観点はなく、古典教育の観点があるのみである。古典を教えることと文語文を教えることとの違いは何か、なぜこの両者を分けて考える必要があるのかについて、現に行われている教科書の教材や教室における実状を参照しながら考察を試みたい。

一

現在の中等教育の「国語」では、文語文の教材はほとんど古典教材を意味している。ここで言う古典とは、近世以前の物語、随筆、和歌、紀行文、俳句等の古典文学に属するものである。古典以外の文語教材もないことはないが、ごく僅かである。中学校では明治の文語詩(島崎藤村など)、近代短歌、近代俳句など、高等学校では「国語総合」・「現代文」で、明治の文語詩(島崎藤村など)、近代短歌、近代俳句など、文語体の小説と評論が一二編採られているに止まる。

生徒にとってみれば、おそらく文語作品と古典作品の区別はない。教師にとつてみても、明治以後の文語作品は、古典の影を引きずった「亜」古典と考えられてはいないだろうか。なぜなら、古典も近代の文語作品も、文語を口語に置き換えることを以て授業の大半としているような実状があるからである。古典を勉強することは文語文を解読することであり、文語文を勉強するとは古典を読むことであると生徒も教師も考えているとしたら、それは一種の錯覚に陥っているといつていい。

何故かと言えば、古典とは文化的概念であり、文語文とは文体上の概念であるからだ。古典教材を使って文語文を口語文に置き換えたとしても、それが古典を学ぶことになっているとは言えない。学ぶ最初の一步にはなっているだろう。

ここでは混乱を避けるため、教育における「古典」に限定して論を進めていきたい。教育における「古典」とは何か。それは日本の文化の様態を伝える文章表現と考える。このことについて、「中学校学習指導要領」の「読む

ことに関する指導」についての「留意事項」として
：古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。

と述べている。また「高等学校学習指導要領」でも、「古典講読」の目標として、

：読むことによつて我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたつて古典に親しむ態度を育てる。

と述べている。

教室を預かる教師としては、この両方の「学習指導要領」に謳つ「我が国の伝統と文化」に対する関心を深めるにはどうしたらいいのか、長年腐心してきた。ある高等学校の古典の教科書では、冒頭で、

今、わたしたちは、古典を通してはるかな昔に生きた人々に向き合おうとしている。
(三省堂「国語総合 古典編」)

と述べている。「向き合ふ」とは何だろうか。古典作品を味読して、確かに「はるかな昔に生きた人々」の姿が現前してくる、ということなのだろうか。しかしこれは、言うは易くしてだれにでもできることではない。ちなみにこの教科書の冒頭の文に続く教材は、見開き二ページに、「竹取物語」、「古今和歌集仮名序」、「源氏物語」の、それぞれ冒頭部分が採られている。

この教材を見たときに、生徒はこの一千年前の文章が、自分にどのようなように関わってくるか、まったく理解できないに違いない。「文化と伝統」をこのようなものとして捉える視点は、「生涯にわたつて古典に親しむ態度を育てる」ことから最も遠いといわざるを得ない。

試みに次のような事例を紹介してみたい。

芥川龍之介の「羅生門」は、戦後の各社の高等学校教科書で使われ続けてきた息の長い教材である。先に挙げた三省堂の教科書では、「国語総合 現代文・表現編」に掲載されている。活字を読まなくなったと言われる現代の生徒も、この作品は引き込まれるような顔で読み耽る。

周知の通り、この作品は、平安時代末期を背景にとり、一人の「下人」の、生存することに対して模索する心理と行動を描いている。その点では、古典

的な背景を借りた現代小説の趣きが濃厚な作品であるが、生徒にとつてみれば、それはどちらでもいい。おそらく彼らの想像の中に、彼らなりの「平安末期」的世界が現出していると思われる。これこそ、古典の世界へ生徒を導入する絶好のチャンスと言っている。

これも言うまでもないことだが、芥川がこの作品のタネ本として、「今昔物語集」や「方丈記」を使っていることは織り込まれたいくつかのエピソードが示している。そして「羅生門」という、説話や謡曲で知られたおどろおどろしい伝説のモニメントは、たといそれが千年前であろうと八百年前であろうと、平成の中・高生が直かに参入し得る世界なのである。

あるいは、芥川の文学を正當に鑑賞し理解するという点から見れば、授業が古典の方に脱線してしまうことは「現代文」として邪道かもしれない。しかし、羅生門の説明をしながら、話が渡辺の綱と茨木童子の話になった時の学生たちの興味津々といった顔つきを見てみると、現在の化石のような古典教育の欠落した部分は何か、少し理解できるように思えてくる。

小説「羅生門」の例から、次のようなことが見えてくる。一つは古典への入口は、必ずしも古典教材の原文にこだわらなくてもいいのではないかということ。二つめは生徒の関心を見極めて、いわゆる日本を代表する古典文学から入らなくてもいいのではないかということである。前者は、何と言つても十代前半の生徒の文語文（それも千年前の）への抵抗感が大きすぎるという点に関わる。後者は、教科書で用意された古典教材が生徒の関心や親近感からかなり遠ざかるという点を意味する。

ちなみに、現行の中学校古典教材について見てみると、各社の差異はわずかで、歩調を合わせたように酷似している。

まず第一学年では「竹取物語」、故事成語（「矛盾」など）、二学年では「平家物語」、「徒然草」、漢詩あるいは論語、三学年では「万葉・古今・新古今」、「奥の細道」、漢詩あるいは論語、である。（学校図書、三省堂、東京書籍、教育出版）

この教材群をどのように料理するかは教師の腕の見せ所であろうが、実際のところ「古典に親しむ」段階に持つて行くにはかなり難しい教材ではないかと推測する。

この教材群の中で、生徒に多少の親近感を持たせるものがあるとすれば、「竹取物語」と「平家物語」（「扇の的」や「敦盛最期」など）くらいだろうか。「竹取物語」ならば現代であつても、子どもの頃に絵本やアニメで物語の大筋を知っている可能性がある。これはまず可としても、「平家物語」

はどうか。これは教師の力量によつて、生徒の関心の持ち方はかなり左右されられると思われる。

一方、「万葉・古今・新古今」や「徒然草」などはよほど生徒の身近な内容の文章でない限り関心を引き付けることは難しい。どんなに価値のある古典作品であつても、単に名作を並べるだけでは、本当の意味で古典に対する関心は湧いて来ようがないのである。

この教材の選定は、高等学校教科書においてもほぼ類似している。三省堂の「国語総合 古典編」を例に取ると、「古文入門」は「宇治拾遺物語」と「古今著聞集」、以下「徒然草」、「枕草子」、「伊勢物語」、「平家物語」、「和歌と歌謡」（万葉・古今・新古今）、「奥の細道」である。

中学校段階と高等学校段階の教材がほぼ同じ作品であるという現在の状況は、どのように解釈すべきなのだろうか。中学校段階で学習した教材を高等学校段階で繰り返すことで理解が深まるという考え方ののだろうか。しかしこれを生徒の立場で想像してみると、栄養はあるかもしれないがおいしくない料理を、中学校では小皿で、高等学校では大皿で食べさせられるというようなものではないだろうか。

先に述べた、入門は原文にこだわらなくてもという考え方に沿えば、中学校の古典入門段階では、「平家物語」を平易な現代文で書いたものから入るという考えもあり得る。また、生徒の関心を惹きやすいものという考えに立てば、「竹取物語」もいいが、「御伽草子」などから「浦島太郎」などを使うことも考えていいのではないか。

ともかく、現状の古典教材では、生徒の「古典に親しむ態度」を育てることとはなかなか難しいと言わなければならない。

二

しかしながら、教師の大部分は与えられた条件の中で何とか生徒・学生に「古典に親しむ態度」を植え付けたいと願ひ、工夫を試みる。私は以下に自分の試みた工夫の一端を紹介してみたい。

先に「万葉・古今・新古今」などは、よほど生徒の身近な内容でない限り関心を惹き付けることは難しいと述べた。しかし作品によつてはかなり生徒の関心を引き付ける作品もないではない。

その第一例は、自分の住むところに関わる作品という「部立」で古典教材を組むという方法である。「万葉集」ならば東歌など東京の地名に関わる歌

（「多摩川に曝す手作り」）などは、好個の教材になるし、「伊勢物語」の「東下り」なども、隅田川、業平橋などの地名、都鳥からユリカモメへの連想など、近世、近代に至るまで「伊勢物語」が江戸・東京人の古典であったことを理解させることができるのである。

もう一つの方法は、一つの教材から別の教材へと枝を広げてゆく方法である。「伊勢物語」の場合も、謡曲「隅田川」などへと派生させられるが、「隅田川」の詞章では、高校生には少し難しいかもしれない。

ここで例示したいのは、「奥の細道」である。この教材は中学校に取り上げられ、高等学校でまた採られている「人気教材」である。その際採られる箇所は、冒頭の「月日は百代の云々」と、「平泉」が多い。初級の古典学習者にとってはややレベルが高いが、朗々誦すべき名文であって、「派生的方法」の教材としても恰好の作品といえる。

日本の古典文学は孤立して存在するのではなく、数百年の時間を超えてつながっているということを理解させるのに、この作品ほど適切なものはない。周知の通り、平泉を訪れた芭蕉の感懐は、その時から五百年前の義経主従の末路を抜きにしては結実し得なかった。この時、芭蕉の胸に去来したものが果たして五百年前の歴史的事実だったかと言えば、実はさらに二百年下って成立した「義経記」に語られる物語だったかもしれない。あるいはまた能や古浄瑠璃の世界であったかもしれない。芭蕉自身すら意識しないこれらの古典群の上に「奥の細道」一巻が屹立している。

そうであるなら、生徒・学生には「奥の細道」とともに、是非とも「義経記」を副教材として読ませたい。そのままでもいい、ダイジェストしても読ませたい。そこから能か歌舞伎の「勧進帳」も視聴覚教材として見せたい。もしこの物語が、現代の生徒の興味を惹くならば、平泉における芭蕉の感懐も理解し得るのである。

かるが故に古典は面白く、同じ理由によって、また難しい。弁慶義経の物語はかつては国民的教養と言つべきものであった。その前提が失われている現代の中・高校生に、いきなり「夏草や」は難しすぎる。

現行の教科書のように、活字を大きくし、旧仮名遣いの脇に小さな字で発音のための小さな仮名を振り、カラーの美しい挿絵を付けたところで、生徒が古典に対する親しみや、もつと古典を読みたいという意欲が湧いて来るはずがない。古典が一つの有機体として働きかけてくるように教材が構成されていないからである。

三

古典に参入するためには文語文を学習しなければならない。これが生徒にとつて大きな障害になっていることは先に触れた。

しかし既に述べたように、古典教育と文語文の学習とは別次元の問題である。古典の文章が「古」文語文で書かれているため、古典文の読解に文語文解読の能力が必要であることは繰り返すまでもない。だが、文語文の学習を数百年前の「古」文語文を使ってやらなければならない理由はない。

文語文は、つい六、七十年前までは実用の文章でもあった。現在の古典作品のみによる文語文の学習は、生徒・学生に、文語文が古典作品に特有の特殊な文章であるという観念を植え付けている。生徒・学生が古典の文章を特殊な文章であると考えても、まったく無理はない。まずそれは近くて三百年前（現在の古典教材は、なぜか十八世紀初頭で止まっている）、遠くは千年前の文体である。さらにそれは、古典文学であるが故に、特殊な修辭法に飾られている。

国語の教員は係り結びや掛詞や、果ては縁語、枕詞、序詞の類を日本語を理解するための当然の知識のように考えがちだが、これらは古典の文章を解読するための特別な語法・修辭法と考えるべきである。

それならば、文語文学習が現在の国語教育に必要とされるゆえんは何であるのか。

中学校で一応は古典を学習してきても、高専・高校の一年生でまず八割以上が理解していないのが、未然形と已然形の違いである。こう言うとき非常に特殊な文法知識のことを言っているようだが、分かりやすく言えば「急がば回れ」と「仰げば尊し」の違いと言つてよい。どちらも「もし」ならば」と理解している。この違いが分からないと長い文章で文脈を正確に把握することができない。あるいは助動詞の基本も重要である。彼らは「夏は来ぬ」と「誰も来ぬ」の区別が付かない。どちらも否定だと思つているのである。さらに反語や二重否定の語法などもまったく苦手である。

これらの知識を理解させるのに、何も千年前の文章をもつてくる必要はない。いわゆる「文部省唱歌」を教材にすれば十分であろう。

「中学校学習指導要領」は、「言語事項」の中に文語文学習は含めていない。

古典の指導のところで、「文語におけることばのきまりについては、細部に

わたることなく、教材に即して必要な範囲の指導に留めること」とある。これは、このように指示しておかないと、熱心な教員が中学生に対して係り結び、掛詞、縁語のたぐいを事細かに教え込む可能性がなくもないと危惧したのかもしれない。その意味では現在の古典教材に沿って教える限り、この文言は妥当であるかもしれない。

「高等学校学習指導要領」では、「第4 現代文」の「3 内容の取扱い」の（5）で、「教材は、近代以降のさまざまな文章とする。その際、現代の社会生活で必要となる実用的な文章も取り上げるようにする。なお、翻訳の文章や近代以降の文語文も含めることができる。」（傍点三浦）とある。また「第5 古典」の項の、「3 内容の取り扱い」で「国語の変遷などについて関心を深めるため、辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較対照すること。」ともある。これがどうやら辛うじて古典以外の文語文の存在を認識した箇所であり、また古典の文語文を通じてではあるが、「国語の変遷などについて関心を深める」よう指導してある箇所である。

現代文教材の一部として、近代の文語文がどの程度取り上げられているか。高等学校教科書各社がそろって採っているのが、森鷗外「舞姫」である。しかしほかに何かあるかというと、福沢諭吉「学問のすすめ」、内村鑑三所感集「口語文評論の引用文に柳田国男「遠野物語」、ほかには現代俳句、現代短歌がとられている。（教育出版）別の社のものでは、「舞姫」以外に、口語文の評論の引用文として福沢諭吉「日々のをしへ」、ほかに現代短歌と現代俳句、文語詩が一つ（島崎藤村「小諸なる古城のほとり」）である。（三省堂）このように書くと、けっこう数多くの教材が採られているような印象を与えるが、実際は、「舞姫」が全文掲載されている以外は、どの文章も一ページ程度の短いものである。なるほど「近代以降の文語文も含めることができる」という「指導書」の文言をほぼ忠実に反映した記述といえよう。

鷗外の「舞姫」は、相当な時間と手間をかけて読了すれば、学生の反応もそれなりにあるという点では、芥川の「羅生門」、中島敦の「山月記」、夏目漱石の「こころ」とともに、後期中等教育教材の白眉と言っていいたい。なにぶん、文語文教材としては、難解な漢語が多く、一方で古典的雅語もあり、文脈はきちんと整ってはいるがセンテンスが長く、生徒には意味のたどりにくい箇所も多い。要するに、近代の文語文としては、初等学習者には不向きである。このような文章を読むのに、十分な過程を踏むことなく教材に組み入れてあるというところに、大きな疑問を感じる。もし本当に「舞姫」を鑑賞させたいのなら、文語についてある程度の「助走距離」を作って最終段階で「舞姫」レベルの文章を読ませるという配慮が必要であらう。

そのための好教材はけっして少なくはない。現に少しずつ採られている諸家の文章もそれに入る。ただしもつと長く採るのである。福沢諭吉「学問のすすめ」「日々のをしへ」、柳田国男「遠野物語」は一年生に向いている。ほかにも中村正直「西国立志編」（この中のコロンブスの逸話や、ジェンナーの話など適当なものが多い）、などがいい。二年生では内村鑑三の「所感集」、正岡子規の随筆、徳富蘆花の随筆など。三年生あたりで「舞姫」、評論ではやや漢文訓読調だが幸徳秋水の文章、少しくだつては永井荷風の日記などでもいいかもしれない。

何故に文語は教育されなければならないのか。それは究極的には現代人である我々にとってそう遠くない過去の文献に対する抵抗を極力少なくし、できるだけ文献自体によつて明治・大正・昭和前半期の文化・思想に関わる文章に触れ、その真価を理解できるようにするためである。

敢えて言いたいのだが、現在の文語教育では、高等学校を卒業してもあるいは特別の専攻を除いて大学を卒業しても、福沢諭吉も中江兆民も、読んで理解することができないのである。一国の文化を考える上で、父祖の行ったこと、考えたことから断絶してしまうほど危ういことはない。百年前の文化や思想について、著述自体に当たって理解する道が閉ざされているとしたらどうなるか。幸か不幸か、前代や前々代を語る書物やメディア情報に現代人は取り巻かれていて、それらは結局、介在する解説者の「翻訳」であり、「翻案」に過ぎないであらう。原典から隔絶されているとしたら、我々は解説者の目を通して福沢や兆民の思想を理解した（つもりになる）ことになる。

現在の国語教育は、戦後から一貫して近代の文語文を教材から追いやリ、言語教育を口語文に限定してきた。このことは、「スキル」としての言語教育が同時代のコミュニケーションを果たせざば足りるという考えに基づいているのであろう。しかし、情報の伝達は同時代のみではなく過去から現在へとつながってのものである。つまり現代の言語教育は、横軸の情報伝達を重視して、縦軸のそれはおろそかにしているということになる。

古典を読むための文語学習という視点は、現代文につながる近代の文語文自体を読むための文語学習という視点へと転換させなければならぬ。そのことが、延いては生徒の文語へのアレルギーを少なくし、古典の文章へ近づき易くなる道を開くかもしれない。